



日本の名作

明治・大正時代に書かれた日本の名作を読んでみましょう。

『^{わがはい}吾輩は猫^{ねこ}である』 (夏目 漱石^{なつめ そうせき})

夏目漱石が、明治三十八（一九〇五）年に発表した作品。猫の目から人間社会を見るといふ、当時としては新しい書き方がされ、多くの人に読まれました。

吾輩は猫である。名前はまた無い。

どこで生れたか頓^{とん}と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニヤーニヤー泣いて居た事丈は記憶^{おく}して居る。吾輩はここで始めて人間といふものを見た。

『^{さんしょうだゆう}山椒大夫』 (森 鷗外^{もり おうがい})

森鷗外は、夏目漱石とならんで日本の明治・大正時代を代表する作家の一人。この作品は、大正四（一九一五）年に発表した、昔話をもとにした物語です。

越^え後の^{ちご}春日^{かすが}を経て今津^{いまづ}へ出る道を、珍^{めづ}らしい旅人^{ひとりむれ}の一群^{ひとぐみ}が歩いてゐる。母は三十歳^{さんじ}を踰^こえたばかりの女、で二人の子供^{こども}を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥^{くたび}れた同胞^{はたらから}二人を、「もうぢきにお宿^{つぎ}にお著^つなさいます」と云^いつて励^{はげ}まして歩かせようとする。

『^{くも}蜘蛛の糸』 (芥川 龍之介^{あくたがわ りゅうのすけ})

芥川龍之介が、大正七（一九一八）年に発表した作品。人間の欲望を題材に書いています。

越後

(現在の新潟県)

同胞

(きょうだい)

或日の事でございます。御迦釈様は極楽の蓮池のふちを、独りで
ぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる
蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊
からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りま
す。極楽は丁度朝なのでございませう。

『小諸なる古城のほとり』（島崎 藤村）

島崎藤村は、明治から昭和時代にかけて活躍した詩人・作家。この作品は、
明治三十八（一九〇五）年に発表したもので、一時暮らした長野県小諸市の風景
をうたっています。

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす藜藿は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色はつかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

遊子（旅人）

藜藿

（春の七草の一つ。）

藉く（敷く）

よしなし

（方法がないこと。）

しろがねの衾

（銀色のふとん。）

岡辺（岡の辺り）

はつかに

（物事的一端が少し
表れること。）

佐久

（長野県佐久市）

